

農業環境研究を支えるインベントリー

Natural Resources Inventory Supports Agro-Environmental Research

上田義治*

Yoshiharu Ueda

年刊誌「インベントリー」も今年4号を数えます。「inventory」という語の元々の意味は財産目録とか在庫品ですが、我々がめざしている農業環境インベントリーのフレームの意味、すなわち、「①土壌、水、大気、昆虫、微生物、植生など農業環境資源の過去から現在にわたって採取された各種の標本や試料の現物、②これらに関連するデータ、手法、知見、技術などの有用情報を集積し分類整理した情報、③これらの情報を発信・利用し、さらに発信した情報が新たな情報を生んで増殖するシステムなどからなる枠組み」もようやく認知されはじめたのではないかと思います。

2005年度は独立行政法人としての第1期の計画の最終年度であり、次期の計画が検討・策定されます。そこで、農業環境インベントリーの意義について今一度振り返ってみます。

昨年末に農林水産省から『独立行政法人農業環境技術研究所の主要な事務及び事業の改廃に関する勧告の方向性』における指摘事項を踏まえた見直し案』が出されました。そこでは、当所の研究について、「農業生産環境の安全性を確保するための基礎的な調査及び研究に特化・重点化を図る。」とされています。農業生産環境が安全かどうかの判断には、その構成要素である個々の農業環境資源の実態把握が欠かせません。将来にわたる安全性確保のためには農業環境の将来予測が必要です。これは、過去から現在に至るまでの農業環境の変遷を科学的に捉えることで可能となります。農業環境インベントリー研究はこれらの要請に応えるものであり、今後の農業環境研究を支える重要な役割を担っていると考えます。

農業環境インベントリーの中でも標本や試料は特に重要です。「インベントリー第2号」に掲載の「保存試料を用いた水田土壌中ダイオキシン類の消長の解析」は、保存された標本・試料により、新たに発生した環境問題を過去にさかのぼって明らかにし、将来のリスク予測に活用できるという好例です。一方で、標本の収集・維持・管理は、研究業績として評価されにくい、成果が目に見える形で出にくい、研究者以外の技術スタッフや予算の手当が十分でないなどの問題もあります。次期計画では「効率化」がさらに問われますが、新たな標本・試料を追加していくことは次の世代に対する我々の責務であることを肝に銘じて、現状の問題にも工夫を凝らしつつ、農業環境インベントリーの構築に取り組んでいく必要があります。それぞれの研究室は、その分野での目に見えるナショナルセンターとして機能することが望まれています。

今後とも、よりよい農業環境インベントリーの構築のためにご支援ご鞭撻をお願いします。

* 農業環境インベントリーセンターインベントリー研究官

Natural Resources Inventory Center

インベントリー, 第4号, p.1(2005)